

# ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

## ——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身に着けるべく、今月も、ともに学んでいこう。

### 第三回

#### 哲学的訓練の一環として、イランを考える

佐藤 2012年1月23日に一つの対イラン制裁強化策がEU（欧州連合）で決定されまし

た。なぜ、このような経済制裁措置が取られるのか？ なぜイランへの監視の目が注がれるのか？

今月はイランという国について考えてみましょう。

このイランという国は、数年以内に人類を滅亡へと導く可能性を有しているかもしれません！

これは決して、脅しではありません。アメリカ、ヨーロッパ諸国、イスラエルは、それくらいの危機感を持っています。

そもそも、イランは、欧米的な考え方とまったく違う「ゲームのルール」で動く国です。

プレ・モダンであり、ポスト・モダンの国でもあります。そのため、欧米諸国と思想戦を展開することが多いのです。

イランのアフマニ・メジャド大統領は、2005年に、イスラエルを地図上から抹消するという過激な公約を掲げました。

——イランは、その公約実現に向けて、動いているのですか？

**佐藤** 動いています。テヘランでの、ホロコーストに関する国際会議で、『ガス室の有無にかかわらず、イスラエルが消滅するのは歴史の法則である。全世界の人民は、イスラエルの消滅に喝采するであろう』と述べています。

それを現実にするために、核開発を行い、ミサイルを製造しています。

イランの持っているミサイルは、北朝鮮のノドン 2号ミサイルをコピーしたシャハブ 3

です。射程距離 2,000 キロ、これはイスラエル全土を射程圏内に収めています。

ということは、このミサイルに核弾頭が搭載し、イスラエルのエルサレムを攻撃することが充分可能になります。しかし、実際はそんなことあり得ないと思う人が多いのが事実でしょう。

——普通はそう思いますよ。いくらなんでもって……。

**佐藤** それは、どうしてですか？

——エルサレムは、イスラム教徒たちにとっても聖地じゃないですか。

**佐藤** メッカ、メディナに次ぐ第3の聖地。預言者ムハンマドが、一日で天に上がって、アッラーと会って、下りてきた。

核ミサイルを撃ち込めば、そのアクサモスクもやられる。

合理主義の枠の中でイラクが行動するならば、核ミサイル発射はない。しかし、非合理的な行動する場合、どうなるか考えてみましょう。

イランのイスラム教徒は何派？

——シーア派です。

佐藤 シーア派の中のどういうグループ？

——シーア派の中も分かれていますか？

佐藤 はい。だから、どのグループですか？

——うーん……。

佐藤 ムハンマドが死んだあと出てきた指導者に付いたグループです。

ムハンマドの娘・ファーティマの婿・アリーとその子孫を正しい伝承者（イマーム）と考えるのが、シーア派です。なかでも 12 イマーム派が、非常に影響力があります。

——12 イマーム派？？？

佐藤 イマームの 11 人目が死んだ瞬間に、12 人目が現れたのだけど、直ぐお隠れになりました。9 世紀終わりから 10 世紀はじめのころと言われています。その後、世界最終戦争が勃発<sup>ほつぱつ</sup>して、ハルマゲドンとなった時、そのお隠れになった 12 人目のイマームが現れて人々を助けるというドクトリン。

ハルマゲドンを信じているのが 12 イマーム派に属する人々の一部にいます。その 1 人

がアフマディネジャード大統領です。

——なるほど。そうなるとイランは、イスラエルに核ミサイル、ぶち込みますね。なんと  
いってもお隠れになった 12 代目イマームが救済してくれるわけですから。

**佐藤** イスラム教徒が救われることになります。そうなると、ミサイルを発射する可能性  
を否定はできません。874 年にお隠れになって、今日まで、ずっと現れていません。そん  
なイランが核を持つ。さらにインテリジェンス（諜報）の世界の常識では、イラクが核兵  
器を持っている確認されたら、可及的速やかにパキスタンの核弾頭をサウジアラビアに移  
動させると考えられています。核抑止の原理がはたらくからです。

——なんで、パキスタンが出てくるのですか？

**佐藤** パキスタンの核兵器を開発するお金を全部出したのが、サウジアラビアです。オー  
ナーの要求に応えない訳にはいきません。

そして、サウジが核兵器を持てば、湾岸諸国、アラブ首長国連邦、カタール、オマーン  
と次々に核兵器を持つ可能性が出てきます。核の拡散が始まります。

核拡散で大変な緊張状態となり、南米のブラジル、日本も核兵器を持たざるを得なくな  
る可能性があります。

—どうしたら、止められますか？

**佐藤** イランに対する制裁を強化することです。イラン産の原油を誰も買わなければ、イランの外貨準備高は6カ月程度で枯渇します。

そうすれば、イランの核開発は、阻止できるでしょう。

それが、できなければ、人類は「核を全員が持つ」という世界での新しい歴史の段階に進むことになるでしょう。

—いま世界は、人類滅亡の第一歩となるのか、否か、瀬戸際の状況なんですね。

## **クリティーク＝批判!?**

**佐藤** 以前、田辺元先生という哲学者のお話をしましたが、今回は<sup>ひろまつわたる</sup>廣松渉先生の『新哲学入門』。これを読み解いていきましょう。

『新哲学入門』中で、「批判という日本語はとかく欠点をあげつらう方面にアクセントがかかりがちだけれども、クリティークというのは吟味、検討の意味であり、全面的に賛成、追認してしまうケースを指すこともある」と廣松先生は述べています。

「クリティーク」は、ドイツ語です。英語だと、クリティック。

「どうも、コミネさんは、最近、僕にはクリティークだね」

——えっ？ クリティーク、クリティーク……。

**佐藤** 一般的な訳した方だと、

「どうも、最近、私に対して批判的で、なんか文句があるんじゃないか？」という意味になります。

しかし、「クリティーク＝批判」とする翻訳は間違えた訳です。

——あれ、誤訳なのに通例として通用するんですか？

**佐藤** 明治時代に、いくつかの誤訳がなされています。その中の最も大きい間違いが、この「クリティーク＝批判」です。クリティークの訳に、「批判」を充てたことですね。

日本語の「批判」はそもそも歌舞伎のタニマチの用語です。

金持ちが、文句をつけるのを「批判」と言いました。

明治時代の初期に、お雇い外国人たちが、日本人にいろいろなことを言うのを見て、「あー、クリティークって、多分、批判のことなのだな」と思ったわけです。

小説の作品を論ずる場合など、文芸批評って言いますよね。

——文芸批判だと、確かに責めているような印象がありますね。

佐藤 そう、だから、文芸批評と少し緩めた言葉になっているわけです。クリティークという単語は、そもそも、相手の立場を承認している場合に使われます。

文芸批評の例では、「あなたの書いている物を読みました。私は賛成です。クリティークです。そこに、私は〇〇という意見を付加したいと思います」これが、建設的なクリティークです。

相手の論を踏まえて、自分の見解を付加していく。これがクリティークの基本形です。「そんな意見は、とんでもねえー」

と拒否するクリティークもありますが、それはごく稀な例です。

クリティークという観点から物事を見るのは、学問にとっては、死活問題に直結するほど重要なことです。

クリティークの姿勢を欠くと、ヘーゲルのいう『阿呆の画廊』です。

——どんな画廊なのですか？

佐藤 いや、画廊はモノのたとえです。

「僕は、Aが絶対に正しいと思う」

「いやいや、私のBが、絶対に正しい」

これは、『神々の争い』とされています。



神々の争いは調停することができません。

いま日本の論壇に活気がなく、つまらないのは、そのほとんどが『阿呆の画廊』か、『神々の争い』になっているからにほかなりません。

相手の論を踏まえて、自分の見解を付加していく。これがクリティークの基本形と言いましたよね。いまの論壇にはそれが欠けているように思われます。

まるで空中戦です。常に勝利宣言を発して、次の場所に行くのが、空中戦です。

クリティークな姿勢の訓練が、まったくない形で、いくら活字を読んでも内在的な論理を掴むことはできません。

## 猫は目を閉じて危機を回避し、死ぬ

佐藤 『新哲学入門』の「幻想の存立構造」という項に、素朴的实在相という言葉が出てきます。素朴的实在相というのは、廣松さん独特の言い方ですけど、通常の哲学の世界では、素朴实在論といいます。

素朴实在論とは、何か？

目の前に水がある。

目の前に机がある。

○○があるということを常識的に理解することが素朴实在論です。

『新哲学入門』の中では、歩みを進めたり、身体の向きを変えることで、そこにあった物



それがオントロジーです。英語ですと、オンソロジー。オンはギリシャ語で「ある」という意味です。日本語だと、存在論になります。

これを理解するために、次回さらに『新哲学入門』を見ていきましょう。

〈つづく〉

### 今月の内容をより深く学ぶための本

『新哲学入門』 廣松渉著 岩波書店（岩波新書）